日輪の王国

第一章

いまだ照葉樹に覆われた古代の森が、ユーラシア大陸の東の海に浮かぶ列島の一面に広がっていた時代、人々は「呪（しゅ）」を司る巫女の下、森羅万象を畏怖して生きていた。

自然との戦いにあけくれていた人々には、互いに争う余裕はなかった。他人の生命を奪う暴力を人々はまだ知らなかった。生命を産み出す女性の神秘な力を「呪」と呼んだ。より「呪」の力の強い女性が巫女として崇められ、共同体の象徴となった。人々は巫女の宣託をもとに、食べ、愛し、祈っていた。

やがて、大陸より伝わった農業が、巫女のありようをかえた。より「呪」の力の強い巫

女の一族が、農業生産物を管理する「蔵」を支配した。彼等の一族はやがて「王」と呼ばれた。「王」の一族に代々伝わる「呪」を受け継ぐのは女たちであった。彼女らの父親や兄弟が、「蔵」を管理し表向きの政事を受け持った。

こうした共同体は、ムラと呼ばれていたが、やがてクニと呼ばれるようになった。

文明のより進んだ大陸の統一国家・漢の史官はこう記した。

「楽浪海中に倭人あり、分かたれて百余国」

クニが増えるにつれ、邪悪な力がこの列島にもたらされた。「武」である。

「農」は、自然のみが生み出していた命を育む源を、人間の手により生み出し、刈り取ることであった。自然を畏怖することの少なくなった人間は、やがて、その持てる力を、他の人間との争いへと注ぐようになった。

ひとつの国の邪悪な女王が「武」を用いて他のクニグニを征服しはじめた。女王は「武」に優れた兵を率い、馬に跨がって他のクニに攻め入った。服属を誓ったクニは女王の奴として生きることを許された。服属を拒んだクニは、王も民も家も焼き滅ぼされた。

女王は、常日頃は王宮の奥深く籠もり、人々に姿を見せることはなかった。太陽を崇め、自らを太陽の化身と称する女王が、その燦然とした姿を現すとき、馬蹄が轟き、クニがひとつ焼かれ、人々の血がおびただしく流された。

女王の名は日の御子、ヒミコ（卑弥呼）。邪馬台（ヤマタイ）国の女王ヒミコという。

ここに一つのクニがあった。山々に囲まれた盆地で民は「農」にいそしんでいた。狗奴（クヌ）と呼ばれたクニはいまだ「武」を知らなかった。

ある秋の朝。一人の若い女が狗奴に迷い込んだ。この時代、クニとクニの境界はない。深山幽谷が自然の境目を作っていた。道はないに等しかった。女は、深い森からこの盆地に現れた。

狗奴の人々は、髪を編むことなく短く切って垂らし、胸部を藤蔓の甲冑で覆い、腰には白布を巻いただけで、筋肉のしなやかに発達した四肢をさらした女の異形に眼を奪われ、次に女が腰に下げた金属器に目をとめた。女は人々の視線に気づき、細長い鉄製の金属器をすらりと抜いてみせた。刃が陽光に鋭く輝いた。

「これは剣である」

「何に使う」

「人を斬る」

狗奴の人々は武器をもって人を殺めることを知らなかった。数日後、山犬が現れ、民を襲った。女は、剣を振るって山犬を斬った。二つに切断された山犬の屍を見て、人々は恐れた。

「その山犬を斬るように人を斬るのか」

「人は、ときに人を憎み、山犬のように人を襲う」

女は説いた。

「人が吾（わ）を殺めようとするとき、吾の命を守るために、その人を斬る」
「誰が、お前を殺めようとする」
「邪馬台国のヒミコを知らぬか」
女は言った。
「ヒミコは多くの人を斬る。ときには一つのクニに生きる人をすべて斬る。吾のクニは王も民もヒミコの兵によってことごとく斬られた。吾だけが剣を使えた。吾だけが生き残った」

狗奴の「蔵」を司る王は恐れた。「呪」のみで生き残ることはできない、
「兵」を備えよ、という女の進言により、王はたくましい若者を選び「兵」とした。
女は、その名をヒナ（比奈）と言った。ヒナは、「兵」に選ばれた若者たちに剣を教えた。剣を使っても、素手で戦っても、ヒナにかなう若者はいなかった。
狗奴の王の娘トヨ（臺与）は十三歳だった。「呪」の力を受け継ぐトヨは、
「武」に興味を持った。トヨは、宮の奥深くに居住し、民の前に姿を見せることは少なかった。トヨはヒナを宮に呼び、「武」の話を聞いた。
収穫の祭りの前日、トヨは宮を出て、裏山の泉に行き、身を清め、神と交わる。トヨ一人で山に入るのがしきたりだったが、トヨの父王はヒナにトヨの警護を命じた。邪馬台の兵が他のクニを襲うのは、収穫の前後であることを、王はヒナから聞いていた。

狗奴の人々は、貫頭衣と呼ばれる、一枚の長い布の中央に頭がはいるだけの穴を穿ち、腰紐で縛っていた。王女たるトヨも同じ装束だった。ただ、身を飾る翠色の勾玉の美しさと数が、他の民びとと、王族たる彼女の身分の差を示していた。
「ヒナよ」
泉のほとりに、白絹の貫頭衣や勾玉を丁寧に置き、編んだ髪の毛をほどき、冷たい水に入りながらトヨは訊ねた。
「邪馬台の民は、神を敬わぬのか」
ヒナは答えた。
「邪馬台国の神は、ヒミコただ一人」
「神が、ただ一人なのか」
天に、雲に、樹に、草に、岩に、川の流れに、それぞれの神が宿る。トヨは、それら八百万の神の意思を感じ取り、言葉にかえて人に伝える。それが「呪」であった。
「ヒミコは、自らを神と呼び、人に崇めさせる」
トヨには分からなかった。蚕のようにしなやかな白い肌。豊かな実りを見せはじめた固い乳房。トヨは、身を包むすべてを投げ捨て、水の神と交わった。五感を研ぎ澄ませて、風や水が人に伝える言葉を聞き取ろうとした。トヨは眼を閉じた。視覚は、風や水の言葉を聞き取る五感を鈍らせるだけだった。
ヒナはトヨを見つめた。狗奴の王女が水に入り、神と交わるとき、玉璧を鋭利な黒曜石

の刃で切ったような美しい顔だちが、霊気を帯びて激しく悶える。その恍惚のなかでトヨは風や水の言葉を聞く。だが、この日のトヨの表情は、土のなかから取り出したばかりの水晶のように動かなかった。

トヨは眼を開けた。陽光が泉の水面をきらきらと輝かせ、風のざわめきに合わせてさざ波が踊っていた。だが、風も水も口を閉ざして押し黙っていた。いや、風や水の言葉を聞き取る五感が鈍ったのか。

「ヒナ」

トヨは水辺に佇む女兵に声をかけた。

「ヒミコは、男よりも強いのか」

「強い。ヒミコにかなう者は、この世にはいない」

「武を磨けば、トヨもヒナのように強くなれるのか」

「ヒナのように強くなれる。あるいは、ヒミコよりも強くなれる」

そのとき、麓の里から叫喚の声が沸き起こった。

ヒナは身を翻し、泉の辺にぬっと天に突き出た岩を攀じ登った。岩のてっぺんからは、狗奴の里が一望できた。

「ヒナ！」

泉に入ったままのトヨが、岩の上野ヒナを見上げて叫んだ。

「里で、何が起こった」

「ヒミコ……」

ヒナは、里を見下ろしながら呟いた。

「ヒミコ？」

「ヒミコが来た。狗奴は滅びる」

里の家々は、はやくも火に包まれていた。逃げまどう民は、藤蔓の甲冑に身を固めた邪馬台の兵の剣にかけられ、血を噴いて次々と倒れた。

剣を抜いて悪鬼のように駆け回る兵たちから少し離れて、里の入口で馬に跨がった四騎の兵が、楽しげに殺戮を眺めていた。

なかでも一際、陽光を浴びて輝いていたのは、紅に染めた絹の胸元を大きく広げ、肋骨のあたりに金箔を施した胴巻きを巻き、豊かな乳房を押し上げ、長い首や剥き出しの腕や脚に玉璧の装身具をあしらい、濡れたように艶やかな長い髪を垂らし、額に金の冠を巻いた女だった。

ヒミコ。

二十五歳の女王は、くっきりと長い眉の下に萱で切ったような切れ長の眼を残忍に輝かせていた。狗奴の民が一人血飛沫をあげて倒れる度に、赤い唇が歪んだ。

彼女の周囲を、若く美しい女兵が三騎、固めていた。

百に足らぬ狗奴の民は、わずかな時間でことごとく殺された。邪馬台の兵たちは、王宮を囲んだ。王宮の周囲を、ヒナが訓練した若い十人の兵たちが矛を構えて守っていた。彼等に五倍する邪馬台の兵たちが、剣を振り上げて襲いかかった。

狗奴の兵たちはよく戦った。七人の狗奴の兵が斃れたが、邪馬台の兵はその倍の死体を地にさらした。

生き残った三人の狗奴の兵はとくに勇敢だった。返り血を浴びてなおも戦意を失わず、鋭い眼で邪馬台の兵たちを睨みつけていた。

馬上のヒミコが、女兵たちに合図した。三人の女兵が頷き、馬を進めた。

「邪馬台の兵どもよ、道を開けよ」

女兵の一人が叫ぶと、狗奴の若者を取り囲んでいた邪馬台の兵たちは、道を開けた。女兵たちは馬を降り、狗奴の若者たちに近づいた。

「猛けき狗奴の男どもよ」

ヒミコが叫んだ。

「汝等はよき兵である。邪馬台の女兵と一人と一人で戦え。勝てば汝等を生かし、邪馬台の兵として食を与えよう」

矛を立てた邪馬台の兵たちがぐるりと囲むなか、生死をかけた一対一の勝負が行われた。最初に出てきたのは、背が高く、肩が岩のように盛り上がった狗奴の若者だった。一方、

邪馬台の女兵は小柄でやわらかな丸顔だった。勝負は明らかに見えた。狗奴の若者は矛を構え、女兵は剣を抜いた。

大力の狗奴の若者は、鋭く矛を突き出した。だが、女兵は敏捷だった。軽く身をよじって矛をかわし、若者をあざ笑った。若者は、顔を歪め、焦って矛を振り回した。女兵は矛を避けるために、膝をおって身を屈めた。若者は、矛を振り上げ、突きおろした。女兵はまたも避けた。若者の矛は深く地面に突き刺さった。女兵は、剣を振り下ろした。矛は、若者の手元からすぱりと切断された。

武器を失った若者は、遮二無二、女兵に襲いかかった。女兵は、ひらりと身を翻して若者の背後に回った。

次の瞬間、若者の動きが止まった。若者は背を丸め、顔を歪めてたちすくんだ。女兵は背後から、若者の股間を蹴り上げたのである。

急所をまともに蹴られ、若者はがっくりと膝をついた。呼吸をすることも、身動きすることもできなかった。女兵が剣を一閃させると、若者の首が落ちた。

邪馬台の兵たちが歓声をあげた。だがヒミコは眉ひとつ動かさず、「次」と別の女兵をうながした。

二人目の狗奴の若者もまた、呆気なく敗れた。

細身で敏捷な若者だった。一人目の大男が力強いが緩慢な動きをことごとくかわされた

のに対して、二人目の若者は、幾度となく素早い突きを繰り出した。女兵は、突き出された矛先を剣で払いのけるのがやっとだった。
だが、それでも、若者は女兵にかすり傷ひとつ負わせることもできなかった。訓練を受けた期間の短い狗奴の若者は、無駄な動きが多かった。若者が、ついに息を切らせて立ちすくんだとき、邪馬台の女兵は、微笑みすら浮かべていた。
女兵が、いきなり剣を投げつけた。若者は、矛をあげて剣を打ち落とした。次の瞬間、女兵は若者の懐に飛び込み、股間を膝で蹴りあげた。
若者は呻き、身を屈めた。女兵はすかさず、若者の両眼を指でついた。人さし指と中指が、深々と若者の眼球を破壊した。
若者は絶望的な悲鳴をあげ、顔を両手で覆った。女兵は容赦なく、がらあきになった股間に爪先をたたき込んだ。若者は仰向けに、どっと地に倒れた。
女兵は剣を拾い上げ、若者の喉を切り裂いた。

三人目の女兵が前に進み出たとき、一人だけ生き残った狗奴の若者は矛を投げ出し、ヒミコの前にひれ伏し、何度も叩頭して命乞いをした。
女兵は、ヒミコの顔を見た。ヒミコは、女兵に眼で合図した。女兵はにやりと笑い、若者の襟首をつかんで立たせた。
「吾等が女王は、汝のような臆病者を嫌う。汝は、辱めを受けて死ぬ」

女兵は、怯える若者の肩を両手で抑え、何度も睾丸を蹴りあげた。若者は身を捩り、地に転がって悶えた。女兵は、さんざんに若者の顔を蹴った。若者の鼻は折れ、口腔の歯はもがれて地面に散らばった。女兵は、若者の背中から、若者が投げ捨てた矛を突き刺した。矛は若者の腹部へと貫かれた。
若者はまだ息をしていた。白眼を剥き、激しく痙攣していた。女兵はとどめをささなかった。
「汝は、息絶えるまで、苦しむ」

「狗奴の王よ。王宮を出て、吾等が女王の前にぬかずけ」
邪馬台の兵たちは、声を揃えて、王宮の奥に籠もる狗奴の王をよびたてた。
橿の木で作られた王宮の扉が軋み音をたてながら開き、王が姿を現した。
「狗奴の王よ。狗奴の民は、すべて死に絶えた」
ヒミコが冷たく笑いながら馬を降りた。
「汝は王である。王である吾が、汝を殺し、狗奴をこの世から消し去る」
ヒミコは剣を抜いた。狗奴の王は黙って王宮の階に立ったまま動かなかった。王は武器の使い方を知らなかった。王は静かに口を開いた。
「狗奴の王は戦わぬ」
「なに？」

「狗奴の王は、武ではなく呪でクニを治める。邪悪なる邪馬台の女王よ。汝は武でもって多くの人びとを殺した。いずれ汝に災いがふりかかるであろう」
「あわれな狗奴の民よ。汝のような臆病な王を戴いたがために、狗奴は滅びた」
「いや、狗奴は滅びぬ。代々の王が受け継いできた狗奴の魂を、汝の武によって断ち切ることはできぬ」
「ほざけ」
ヒミコは王宮の階段をかけあがり、狗奴の王の股間を蹴りあげた。狗奴の王は、苦痛に顔を歪めた。ヒミコは王の腕をかつみ、階段から突き落とした。狗奴の王は泥にまみれて転がった。
ヒミコは、狗奴の王の右腕をつかみ、へし折った。剣を抜き、左の腕を切り落とした。さらに、両脚を切った。狗奴の王の四肢は、折れた右腕を残して肉体から切り離された。狗奴の王は血の海に転がりながらも、なおもヒミコを呪いつづけた。
「狗奴の魂は滅びぬ。邪馬台の女王よ、汝の身に災いがふりかかるであろう」
ヒミコは、王の口を踏みつけた。王の歯が折れ、顎がはずれた。ヒミコは、王の舌を剣で切った。
ヒミコが、狗奴の王の言葉を理解できたのは、王宮に踏み込んでからだった。王宮には、もう一人、狗奴の王の娘がいるはずだった。
「狗奴の王女を探せ！」

ヒミコは兵たちに叫んだ。
「狗奴の王女を生かしておいてはならぬ。狗奴の魂はことごとく滅ぼさねばならない」

「ヒナ！」
山上の岩の上から、狗奴が滅ぼされるのを見ていたトヨは、傍らのヒナに向かって悲痛な声を絞り出した。
「なぜ、汝は吾を止めた」
「行けば、邪馬台の兵に殺される」
「汝はなぜ、剣を抜いて、邪馬台の兵たちを斬らぬ」
「吾は、狗奴の王から、狗奴の王女を守れと命じられた。吾一人で邪馬台の兵を全て斬ることはできない。吾は、狗奴の滅びを救うことはできない。吾は、狗奴の王女の命を守らねばならない」
トヨは、岩に顔を伏せてすすり泣いた。ヒナは、トヨの肩に手をかけた。
「狗奴の王女よ。生き抜かねばならない」
「生き延びてどうする」
「生き延びて、狗奴の人びとの仇を討つ」
「仇？」
「狗奴の人びとは、恨みを飲んで死んだ。その霊を鎮めるためには、狗奴を滅ぼした邪馬

台を滅ぼさねばならぬ」
トヨは顔をあげた。
「吾が、邪馬台を滅ぼすのか。吾は武を知らぬ。女の吾は、力が弱い」
「女でも、男を打ち負かすことはできる。邪馬台の女兵は、狗奴の兵に勝った」
ヒナは、トヨの股間に手を差し入れ、薄い茂みをまさぐった。
「男の股には、女にはないものがある。ふぐり玉という。ふぐり玉を傷めつければ、どんな大力の男でも、力を失う」
トヨは、股間をまさぐられながら、ヒナを見つめた。
そのとき、岩の下がざわめいた。三人の邪馬台の兵が茂みから姿を現した。ヒナは、トヨに微笑んだ。
「狗奴の王女よ。目を逸らさずに、見よ」

ヒナは剣を置き、藤蔓の甲冑を脱いだ。豊かな乳房の周囲は、鉄片をしこんだ布を巻いていた。細身だが、鍛えられた筋肉がしなやかに輝いていた。
邪馬台の兵たちは、突然、姿を現したヒナに驚き、脚を止めた。
「狗奴の王女か」
一人の兵が言った。ヒナは答えた。
「否」

「王女ではないのか」
兵たちは落胆したが、一人の兵が思いついたように言った。
「狗奴の王女でないならば、生かして女王様の面前に連れてゆかずとも、ここで吾等が好きにすればいい」
とたんに、三人の兵たちの表情は、欲望を漲らせた獣にかわった。ヒナは笑った。
「邪馬台の兵たちよ。汝等は愚かにも狗奴の山中で命を落とすか」
次の瞬間、ヒナの躯が跳躍した。岩の上から見下ろしていたトヨにも、何が起こったのか分からぬほど素早い動きだった。
あっという間に、二人の兵たちは地に転がった。一人目の兵は、爪先で、二人目の兵は膝で、股間を蹴りあげられた。ヒナは、三人目の兵に抱きついていた。左手で兵の頭髪をつかみ、右手は、兵の股間にあてがわれていた。兵は、白眼を剥き、口を開いたまま、金縛りにあったように動かなかった。ヒナは、兵の睾丸をひねりあげていた。やがて、兵は血反吐をはいて倒れた。
ヒナはさらに、悶絶する兵の一人に近づいた。兵は、股間を両手で抑え、うつぶせになり、尻を突き出していた。ヒナは、背後から兵の股間に手を差し入れた。兵が顔をあげ、なにか叫んだ。やがて、その兵も血反吐を吐き、意識を失った。
「狗奴の王女よ。ここへ」
ヒナは見上げて叫んだ。トヨは、こわごわと岩を降りた。

「二人の兵のふぐり玉を潰した。彼等は、もはや立ち上がることもできぬ。たとえ、生き長らえたとしても、女とまぐわうことも、子をなすこともできぬ。男にとって、死ぬに等しい辱めを与えることになる」
ヒナは、残った一人の兵を抱き起こし、背後にまわってはがい締めにした。兵は、うつろな眼でトヨを見た。抗う気力もないようだった。脚ががくがくと痙攣し、今にも倒れそうだった。
「狗奴の王女よ。この兵の、ふぐり玉を蹴るがいい」
トヨは驚いた。ヒナは言った。
「狗奴はもはや滅んだ。トヨはもはや王女ではない。男どもの欲望から、自ら身を守らねばならない」
トヨは、兵に近づいた。まだ若い兵は、苦痛に顔を歪めながら懇願するようにトヨを見た。トヨは躊躇った。ヒナは励ますように言った。
「この兵の剣は、罪もない狗奴の民びとの血を吸った。罰を与えねばならない」
トヨは決意した。狙いを定め、兵の股間を蹴りあげた。兵が呻いた。トヨの足の甲に、やわらかな肉の玉の感触が残った。
「もう一度」
ヒナの声に、トヨはさらに兵の股間を蹴りあげた。兵は身を捩り、涙を流した。今にも倒れそうだった。

トヨは、力をこめて、三度目の蹴りを浴びせた。兵はもはや立っている力もなく、背後のヒナに身をもたせかけ、声にならぬ叫びを発しながら、顔を左右に振った。
「狗奴の王女よ。この男の股を見よ」
邪馬台の兵は、麻のズボンを穿いていた。ヒナは兵のズボンを脱がせた。陰嚢が熟れた石榴のよう赤黒く膨れあがっていた。
「ふぐり玉が赤く腫れている。狗奴の王女よ。ふぐり玉に触れよ」
トヨは手を延ばして兵の陰嚢に触った。兵は全身を痙攣させ、悲鳴をあげた。腫れ上がった睾丸が二つ、トヨの掌に収まった。ヒナは続けた。
「ふぐり玉は、男の躯のなかでいちばん弱い。吾が手を離せば、この男はもはや立つこともできない。狗奴の王女よ、その二つの玉を強く握り、潰せ」
「諾」
トヨは上気して、力をこめた。睾丸が平たく変形し、やがて潰れた。兵は血反吐をはき、紙のように地に崩れ落ち、そのまま地を転がり、泉へ沈んだ。兵の躯が水中に消え、どろりとした血が浮き上がった。聖なる泉が血で?されたのだ。トヨは思わず叫んだ。
「あ」
「狗奴の王女よ」
ヒナが厳しく叱責した。
「しばし呪を忘れよ。武なくして生き残ることはできない」

ヒナは、トヨに衣装を脱ぐように言った。呆気にとられたトヨの貫頭衣を脱がせ、自らも全裸になり、トヨの衣装を身につけはじめた。
「狗奴の王女よ。吾が着ていたものを着よ。吾の剣を持って逃げよ」
「ヒナは、逃げぬのか」
「吾は逃げない。吾は、トヨになって、ヒミコの面前に行く」
「ヒナは、ヒミコに殺される。トヨは一人では逃げない。ヒナと一緒に逃げる」
ヒナは言い聞かせた。邪馬台の兵たちは必死でトヨの行方を探しているだろう。ヒナ一人で邪馬台の兵を全て倒すことはできない。自分が身代わりになり、時間を稼ぐ。その間に、逃げるしかない。
トヨは涙を流し、激しく首を振りつづけた。遠くで、兵の足音が聞こえた。ヒナは立ち上がった。
「早く行け。邪馬台の兵がそこまで来ている」
「トヨは行かぬ。ヒナと一緒でなければ、行かぬ」
「聞き分けのない狗奴の王女よ。行かねば吾が斬る」
ヒナは、剣を振り上げた。トヨは悲鳴をあげてあとずさった。ヒナは、自分の着衣と剣とをトヨに投げつけた。
「早く行け。行きて、生き延びよ」
トヨは去った。ヒナは木の根にもたれ、眼を閉じて時を待った。邪馬台の兵数名が草を

踏み荒らしながら姿を現した。
「汝は狗奴の王女か」
ヒナは微笑んだ。
「然り」

ヒナは、ヒミコの面前に引き据えられた。二人の屈強の兵が、ヒナの背後から剣をつきつけていた。
「狗奴の王女よ。狗奴は滅んだ」
ヒミコは言った。
「選べ。ここで斬られるか。それとも、邪馬台の生口となるか」
「生口となれば、どうなる」
「狗奴の王女よ、汝は美しい。他国の王に売れば邪馬台は多大な利を得る」
ヒミコは、大陸や半島の諸国家に、生口と呼ばれる奴隷を献上し、外交関係を結んでいた。ヒナは口を歪めた。
「邪馬台の女王よ。狗奴の王女が、生口に身を落として生きることを望むと思うか」
「では、汝はここで死ぬ」
「いや、死なぬ」
不意に、ヒナは、貫頭衣をみずから引き裂いた。豊かな乳房があらわになり、背後の兵

たちは眼を奪われた。
ヒナはくるりと振り向き、一人の兵の股間に拳を打ち込んだ。兵は苦痛に顔を歪め、剣を落とした。ヒナは素早く剣を拾い上げ、二人の兵を斬殺した。あっという間に、二つの首が転がった。
ヒナは剣を振りかざし、ヒミコに斬りかかった。ヒミコは、あやうく身をかわした。ヒミコの頬に、一筋の血が流れた。ヒナが、二の太刀を浴びせようとした瞬間、三人の女兵が、剣を投げた。三本の剣がヒナの躯を刺し貫いた。

ヒミコは、狗奴の王宮の財宝や備えてあった米を奪った後、大穴を掘らせ、狗奴の民の屍を埋めた。穴には土をかぶせ、狗奴の王と王女の首を並べた。首のひとつはヒナの首であった。ヒナは眼をかっと見開いたまま、死んでいた。瞼を閉じさせようとしても、眼は開いたままであった。